

銀座十字屋創業の顛末

西洋音楽のルーツを
探る

前回、初四郎は日露戦争下にも関わらず商品の仕入を行って事業の拡大を図っていたことを述べた。取引は当然外貨建てであり、その外貨をどのように調達していたかは定かではなかったのだが、ここで、もう一人の重要な人物が登場する。

当時の十字屋の金庫番をしていたのは、倉田繁太郎の妻であり初四郎の母でもある倉田まさであった。まさは、初四郎が帰国するまでの仕入担当として、楽器・楽譜・書籍全ての発注から支払いまでを担っていた。俗に言う金庫番であった。まさは、創業メンバーである原胤昭の弟子で敬虔なキリスト信者であったと言われている。当時開校していた原女学校の生徒であったという説もあるが、少なくともキリスト信者としての共通点はあった。信仰にあつくまじめなまさはの資金管理術は、堅実そのものであったようだ。

さて、当時の十字屋の重要顧客を大きく分類してみると次の三つであったようだ。一つは学校をはじめとした官公庁などのお役所、二つ目は国内の法人・個人のお客様、そして三つ目は教会をはじめとした在日外国人達であった。

この三つ目の外国人の顧客との取引について、十字屋は強みを持っていた。実際の帳簿等が残っているわけではないが、おそらく外貨での販売を行っていたと想像している。通常の店舗であれば円での取引しか行わなかったのだろうが、当時より輸入や米国での事業（初四郎渡米）を行っていたため仕入資金としてストックを続けていたようだ。これは、まさはの先見の明であったと思う。今後の事業の方向性を自身の感性で感じ取ってその準備を着々と進めていたと考える。

国で習得した楽器ビジネスを日本で展開するにあたって、外貨資金という強い後ろ盾を母から得ることができた。そして世界から新しい楽器や音楽を輸入する事業に発展させることができたのである。

こうして、戦時下の一番の問題であった資金確保は、まさはの功績でクリアとなり、会社としての体裁も整ってきた。

(株)株式会社十字屋 倉田恭伸
(次号に続く)



倉田まさ

銀座十字屋創業の顛末

西洋音楽のルーツを

探る

楽器の知識と米國留学で培った語学力で、初四郎は海外の楽器メーカーとの直接取引を積極的に関拓していった。最初に取引先として交渉をスタートさせたメーカーに、ドイツのハーモニカメーカーであるホーナー社（Hohner）がある。読者の皆さんも一度は吹いたことのある楽器だと思いますが、明治三十年頃から日本に正式に輸入されるようになった。最初に日本で紹介したのは十字屋であったようだが、真偽は定かではない。

明治時代に米國で大変人気のあったハーモニカは、日本では西洋横笛というネーミングで発売。このハーモニカの最大手であったホーナー社との直接取引に向けては、米國支社を通じて交渉を重ね、ようやくドイツ本社との取引を開始できるようになった。

手軽なハーモニカは、折からの日清日露戦争での国民気運の高まりから「戦捷笛」として、日本中に瞬く

間に普及していった。軍歌にもマッチした楽器でもあったため、老若男女を問わずハーモニカは親しまれる楽器としてその地位を確立したのである。その仕掛け人の一人として初四郎も大いに関わっていた。

独占輸入の権利を背景に国内一手販売をするも、構造がシンプルな楽器なために輸入後まもなく、日本の製造者も多く現れたようだ。しかし、ホーナー社の販売台数は他の追隨を許さなかった。おそらく、単なる輸入販売であれば価格競争に負けていたであろう。

しかし、初四郎はハーモニカの販売に伴い、楽譜の出版も自ら行ってその普及に努めた。ハードとソフトの一体販売は、十字屋創業からの一貫した取り組みといえる。ハードの卸に徹する傍ら、コンテンツの供給は自ら行うスタイルが十字屋の特徴であったようだ。これは、書店が母体とするところからの表れであったのだと想像する。

初四郎の開拓意欲はハーモニカに止まらず、同じドイツのピアノメーカーであるブルースナーとの取引を開始したり、米國のピアノメーカーであるクラウンピアノとの取引を開始したりと、積極的に仕入ルートの開拓を推進していった。

（次号に続く）

（株式会社十字屋 倉田恭伸）



初四郎編のハーモニカ曲集

銀座十字屋創業の顛末

西洋音楽のルーツを
探る

今号は、イタリア特集ということもあって、イタリア固有の楽器マンドリンと十字屋の取り扱いの変遷について触れてみたい。

マンドリンが日本に入ってきた起源は諸説様々であるが、明治期には日本にも入ってきており、個人の愛好家や外国人から譲られたものなど多少は市場に出回っていたようだ。しかし大変に希少で高価な楽器でもあり、一般に購入するにはなじみの薄い楽器であった。しかし、その音色や演奏は日本人の肌にあっていたのか、マンドリン自体は親しまれていて、今なお日本では根強い人気がある。

当時マンドリン演奏の普及に尽力されたのが比留間賢八氏であり、徐々に日本での愛好家も増えていった。比留間氏の門弟がその後も活躍し、今のマンドリン文化の基礎を築いたといっても過言ではないだろう。

倉田初四郎の代になって、このマンドリンという楽器に十字屋も注目しはじめた。しかし、とても希少であるということと、生産がイタリアに限られていたため、安定した取り扱いはできなかった。思い立ったら即行動の人であった初四郎

はすぐにイタリアに飛んで直接交渉をしたかと思いきや、時代がこれをゆるさなかった。第一次世界大戦の勃発である。世界情勢は混沌としていた。大正三年（一九一四年）から輸入事業はしばらく休業状態となった。

大正七年（一九一八年）にこの大戦もようやく終戦を迎え、初四郎は兄弟や取引先からの要望でアメリカへの視察買付けに行くことになった。新規取引先の開拓を目的としていたが、アメリカだけに止まらず、ヨーロッパにも足をのばした。終戦間もないヨーロッパでは、検閲も厳しく入国もままならない時代であったが、オランダを経由してドイツへ入国することができたのは幸運であったであろう。

前号でも紹介したホーナー社へもこのときに訪問し、ドイツ本社との直接取引をまとめた。その後も各国を歴訪する中で、念願のイタリアへの訪問もかなった。イタリア訪問で真っ先にアプローチしたのがマンドリンの名奏者でもあり製作者でもあったラファエレ・カラーチェ（Raffaele Calace）であったようだ。どのような話をしたかは定かでないが、日

本におけるマンドリン人気の紹介や、楽器不足などを訴えたのだろう。初四郎の熱意が通じて、このカラーチェの独占輸入権までの仮契約を締結し、長い欧州視察も終了となる。出発から帰国までおよそ二年半の長旅となった。

ちなみにカラーチェが日本に輸入されたとき、十字屋の従業員はこれを「カラス」と呼んでいたそう。スペルから想像したのだと思うが、武井マンドリンオーケストラの武井守成氏からは、カラーチェといつも訂正されていたようだ。

（次号に続く）
（株式会社十字屋 倉田恭伸）



中央で和服を召されているのが、ラファエレ・カラーチェ。イタリア大使館員や十字屋の面々と共に明治記念館で撮影したものと思われる。右から2人目が若き日の倉田繁太郎。（大正14年）

銀座十字屋創業の顛末

西洋音楽のルーツを探る

当時、日本でのマンドリンの主流

は、まだまだカラーチェではなく、ヴィナッチェが歴史も古く比較的流通していたメーカーであった。そんな中で初四郎が正式な輸入代理店としてカラーチェと契約できたことは、当時としてはセンセーショナルな内容であったようだ。特にマンドリン音楽会からは感謝状が贈られてきたほどであったからである。

マンドリン音楽の普及に向けて、イタリアとのルート開拓を成功させた初四郎であったが、残念なことに欧州視察から帰国してまもなく、この世を去る。カラーチェとの契約調印などに立ち会うこともできず、急逝してしまったのだ。初四郎の死後は、弟の菊次郎に経営は委ねられた。初四郎の長男である三代目繁太郎はまだ幼かったためだ。

ちなみに、現在の十字屋の会長である倉田楨の父が初四郎であるのだが、初四郎が急逝したときは数えて三歳であったため、父の記憶はまっ

たくないとのことである。

この渡欧では、マンドリンだけでなく数多くの楽器の取り扱いがスタートした。例えば、フランスはエラール (Erard) やガボー (Gaveau) といったピアノの輸入契約を締結。特にガボーは当時新進のメーカーであり、日本国内一手販売 (独占販売) の条件で契約を結ぶこととなった。そのほかにもドイツのカルマン (Kallmann) や、アメリカのマイナーなピアノも含めて何十台ものピアノを購入しては日本へ送っていた。当初、アメリカのピアノは鼻にも引つかからないほど人気がなかったのだが、実際に音を出してみると割合と音が良く、評判となって結果としては完売した。

このように第一次大戦によって享受した日本の好景気のタイミングに、初四郎の活躍によって第二の基礎を築いた十字屋であった。しかし、彼の突然の死は、十字屋の災難の始まりでもあったのだ。十字屋の指揮

をとっていた二代目の早すぎる死に対して初代・倉田繁太郎は心身共にやつれ、初四郎の後を追うように大正十二年にこの世を去る。繁太郎の死後すぐに、関東大震災が発生し、銀座の店舗は焼失。創業以来の危機が迫ったのである。

(次号に続く)
株式会社十字屋 倉田恭伸



大正初期の店内。右にスタンウェイをはじめとしたピアノ、左のショーケースにはマンドリンが置いてある。

銀座十字屋創業の顛末

西洋音楽のルーツを
探る

倉田初四郎の死去から十字屋は創業以来の危機を迎えることになった。二代目として事業の確立と道筋をつけた矢先の逝去は、まず倉田繁太郎の心身にも深く影響を与えた。

初四郎に事業を承継した段階で、経営の前線から引退していた繁太郎にとって、再度の現場復帰は相当な負担となっていた。その理由として、繁太郎は常に経営方針において「小売に徹しろ」と言ってきた反面、初四郎は輸入事業を皮切りに国内への卸事業などを次々に展開して礎を築いたので。根本的な経営方針の違いは、事業を継ぐ繁太郎にとっては大きな壁でもあり時代に逆行しなければならぬジレンマを抱えていた。そのため、繁太郎は表立っての復帰を避け、初四郎の弟である倉田菊次郎を店主に据えることにした。

しかし、初四郎逝去は繁太郎の心身を蝕んでいた。そのため大正十二年の関東大震災の前に亡くなることに。ここに挿話がある。残された家

族が語ったところによると、繁太郎が関東大震災前に亡くなったことは、唯一の慰めであったということだ。最愛の後継者を亡くし憔悴しきっていた繁太郎の姿は、当時相当なものであったのであろう。この状況でさらに自身で築き上げてきたお店が焼失していく姿を目の当たりにしたら、その悲しみと絶望感を思うといたたまれなかったことを語っている。

初四郎の正式な後継者は、息子である三代目繁太郎であった。しかし彼はまだ幼児であったため、成年になるまでの間、菊次郎が店主として社業を継続して担うことになった。菊次郎は初四郎がヨーロッパで締結してきた各楽器メーカーの取引を引継ぎ、十字屋の三代目店主として初四郎の方針を守り立てて社業の維持に専念していた。また、三代目繁太郎の肝いりでスタートした映画事業の創設などでも全面的にバックアップをしていた。

昭和十二年には、会社登記して株式会社を設立。繁太郎への事業承継の道筋をしっかりと打ち立てたのだ。ちなみに十字屋の初代代表取締役は菊次郎であった。

しかし、ここでも死神に魅入られた倉田家。後継者である三代目繁太郎は、代表取締役になる前に病気でこの世を去ることになった。

(次号に続く)

株式会社十字屋 倉田恭伸



倉田菊次郎（最前列中央）。会社設立とともに初代代表取締役社長に就任した。

銀座十字屋創業の顛末

西洋音楽のルーツを探る

「女系因縁」。こんな言葉がまことしやかにささやかれるようになったのは、三代目繁太郎が逝去してすぐのことであったようだ。初代繁太郎から始まった血筋において、ことごとく家督を継ぐべき長男の死去は、事業の継承においても大きな影を落とすことになったのだ。

家督と長男、血筋と血縁といった風習が少しずつ薄らいできている現代ではあまり想像できないこともある。

しかし、明治・大正・昭和の時代においては、まだ色濃く人々の中に普通のこととして意識されていた時代であった。そのため、初四郎死去の際にも、事業の継続を行う上で初四郎の弟である菊次郎が経営を見る傍ら、会社の所有に関する権利は、当初三代目繁太郎に相続された。彼が経営を担えるまでの一時的な措置として所有と経営の分離を図っていたのだ。家督を相続した三代目繁太郎が死去した際も、あくまでも直系血族にあたる初四郎の娘・倉田 榎へと相続されたのである。既に実務的な経営については菊次郎が全般を見ていたので、表面的には問

題なく相続もされ経営基盤も大きく揺らぐことはなかった。さらに菊次郎への目付け役として、当時は初四郎の妻であった倉田モンが健在で、帳場を取り仕切っていたのだ。

倉田家としては、早く榎に養子を迎えさせ経営権についても確固たる基盤を作る必要性があったのだ。というのも、倉田榎は大正生まれの銀座育ち。想像通り大正ロマンを地で行くような生活を送っていた箱入り娘であり、とても経営などはできなかったのである。末っ子の女子が家督を継ぐなどは、考えられない時代でもあったので仕方がないことではあったのだが。そのためには、経営を担ってもらえる伴侶を探す必要があった。

特に榎の母親であるモンは、婿探しの陣頭をとって善き伴侶を探すべく奔走した。そんな中、お見合いを経て縁あって昭和十五年に無事結婚することになった。第二次世界大戦最中のことである。戦時中のモンは、心境を思うと、よくぞ婿を迎え入れられたと、先祖への感謝と自分の使命を果たした達成感に満ちていたことであろう。

迎えた婿は杉 靖夫。倉田家の養子となり、しばらくして娘の千恵子（現社長）を授かったのだが、運命はまたも倉田家に大きな試練を迫ったのである。二十代であった靖夫に赤紙が届くことに。つまり召集令状によって徴兵されることになったのだ。まだ、千恵子が榎のお腹にいるときであった。

冒頭で申し上げた「女系因縁」のなせる業なのか。靖夫は、出兵先のフィリピンで戦死をすることになった。三度にわたり経営を承継するべき男子がこの世を去らなければならぬ因縁。

まさに女系因縁は、徐々に十字屋の経営基盤を揺るがすことになっていったのである。

株式会社十字屋 倉田恭伸

(次号に続く)



榎の結婚式で撮られた写真